

が突然倒れられてから、十八年もの間、この老人は大きな字の書かれたボードをゆつくり一字ずつ指し示しながら、会話をし、医薬チューブ（口から食べられないため、胃に穴をあけ管を通した状態）からの流動食及び薬の投与、紙オムツと猥褻的な介護の中で奥様を暖かく見守ってこられました。「淋しくなられましたね」と声をかけると、小声で「悔いはありません。これからは苦勞を共にした家内の分まで楽しみます」と言われました。今年で八十二歳を向かえるこの老人の細く、丸くなった、小さな背中に私は愛を感じ、思わずイエス様からの大きなプレゼントがありますようにと祈らずにはいられませんでした。

『神学生との思い出』

ヨゼフ 山田 芳己

二年前、お二人が神学生としてパプアニューギニアから留学して来られました。息子と同じ位の年齢で母国を離れ、言葉も文化も違う異国で勉強することは不安で一杯だったと思います。

ファビアンは人懐っこく何事も前向きでいつもみんなに声をかけていました。

ロバートは少しはにかみ屋でいつもニコニコしていて気がつけば側に居て話を聞いていました。彼等のオープンで気さくな性格と勉強熱心なところに共感し、私も少しは日本語と文化を伝える手伝いが出来るのではと、努めて話すようになりました。

ある時、一緒に野球観戦する機会があり、二人がドームの大きさにビックリし、スリリングな試合展開に大声援を送った姿は、今でも強く心に残っています。

春には満開の桜を目の当たりにしてその美しさに心を打たれたそう、部屋の間からも桜が見えるので特等席だと私に嬉しそうに語ってくれました。

冬には初めての雪に驚き、本部の前で雪だるまを作り二人して雪合戦をして遊んでいました。そんな彼らの無邪気さに親近感が増しました。

ミサ中の演奏とハーモニーは、心の中に染み込み、鳥肌が立つほどに感動し、私はミサがとても待ち遠しくなりましたが、今では彼等の歌声を聞けず寂しく思います。

みこころバザーを始め、色々な行事にも進んで協力してくれて、屈託の無い笑顔で子供たちから慕われた彼等が、多くの人から親しまれる神父様になります様に、そして城北橋教会の主任司祭として来ていただけます様に、主の御導きを心からお祈り申し上げます。神に感謝。

